

ガマをめぐる沖縄戦の伝承

文化科学研究科・日本歴史研究専攻 村山 絵美

ガマをめぐる沖縄戦の伝承

文化科学研究科・日本歴史研究専攻 村山 絵美

沖縄は、アジア・太平洋戦争において地上戦を経験したことから、戦争体験を次世代に伝えていく活動が活発に行われている地域である。戦争体験者の証言活動やその記録化、戦跡・基地を案内する平和ガイドの活動、そして戦争資料館・博物館・美術館での戦争展示など、さまざまな形で戦争が伝えられている。

近年では、平和学習の場として沖縄を修学旅行先に選ぶ学校が増え、それとともに平和ガイドの需要も高まってきている。平和ガイドとは、戦跡・基地を案内し、戦争と平和について考えてもらう活動をしている人々のことを指す。1970年代から研究者や教職員を中心に住民の視点で沖縄戦を伝えていこうという活動が始まり、それが市民運動へ波及して現在の平和ガイドの活動に至っている。年齢は10代から70代までと幅広いが、平和ガイドの大半が非戦争体験者である。

平和ガイドの中心となる活動は、ガマと呼ばれる自然洞窟の案内である。ガマは、戦時中日本軍による陣地壕、野戦病院、住民の非難壕として使用され、ガマによっては火炎放射器で焼かれた跡や、遺品、遺骨などが散在しており、沖縄戦の「もの言わぬ語り部」として認識されている。本報告では、沖縄戦がガマを介してどのように伝承されていくのか、その伝承過程について報告する。

平和ガイドがガマを案内する際には、まず戦時中のガマの様子を知る戦争体験者の証言が必要となる。証言は、自治体史の戦時記録や個人の戦争体験記、証言集など既に記録化されたものの中から、平和ガイド自身を選択して語る。また、文献以外にも平和ガイド内で勉強会を開いたり、独自の戦争体験者からの聞き取り調査で得た知識をもとに説明を行なう。その際に必要になってくるのが、ガイド自身の語り以外にガマという場の力である。特にガマを案内する中で、一番メインともいえる体験に、暗闇体験と呼ばれるものがある。各自手持ちのライトを数秒間から数分間消して、完全な闇の中で当時の状態を追体験させる体験である。ここでの暗闇は、当時の様子を体感するとともに戦死者への想像力を喚起させる装置ともなる。ガマの見学者は、戦争をリアルに感じたなど暗闇体験についての感想が多い。

ガマを元に語られる話の段階を整理すると、はじめに戦争体験者の証言があり、それを元に勉強した平和ガイドの説明があり、そしてガマを体験した参加者の体験談と三段階に分けることができる。戦争体験者から非体験者への語りへと移行し、戦争体験のリアリティーが薄れていくなかで、語る場の力が注目され、ガマなど身体的感覚に訴える伝承方法が導入された。その一方で、戦争のリアルさを追及すればするほど、幽霊話など語り部や平和ガイドの意とは反する話が発生する場合がある。今後の課題として、この本来の意図とは異なる話が、場所の持つ記憶とどのように関連し、影響を与えているかについての追加調査が挙げられる。